恋に滅びた人びと

—近松の名作から—

小田嶽夫

滅びた人びと

―近松の名作から―

小田嶽夫

読売新聞社

著者紹介　おだ　たけお（本名・武夫）
明治三十三年七月五日、新潟に生まれる。大正十一年、東京外語専門学校中国語科卒業。昭和十一年上半期芥川賞を「城外」にて受賞。
おもな著書　短編集「城外」「佗のある話」長編集「桃花扇」「義和団事件」伝記「魯迅伝」ほか著書多数
現住所　埼玉県新座市栗原四―八―五

恋に滅びた人びと　―近松の名作から―　定価　六三〇円
昭和四十八年二月十日　第一刷
©, Takeo Oda 1973
著者　小田嶽夫
発行者　松田延夫
発行所　読売新聞社　東京都千代田区大手町一の七の一〒100
大阪市北区野崎町七七〒530
北九州市小倉区明和町一の一一〒802
印刷所　凸版印刷株式会社　製本所　株式会社堅省堂

0093－701220－8715

恋に滅びた人びと

近松の名作から

もくじ

小春と治兵衛　心中天網島　五

おさいと権三　鑓の権三重帷子　三七

梅川と忠兵衛　冥途の飛脚　六七

河内屋與兵衛　女殺油地獄　九九

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

お種と源右衛門　堀川波鼓　一三一
お初と徳兵衛　曽根崎心中　一六三
小女郎と惣七　博多小女郎波枕　一九三
おさがと嘉平次　生玉心中　二二五
近松門左衛門のこと　二五五

装丁　重原保男

小春と治兵衛

心中天網島（しんじゅうてんのあみじま）

朝飯をすますと又治兵衛は、ごろりと炬燵へ横になった。眠るでもなく醒めるでもなくただぼんやりしていた。時々サラサラと雨が屋根を打つが、直きに止む。しばらく間をおいて又雨の音が聞こえて来る。が、やっぱりいつのまにか止んでしまう。

前の晩起こった小春との交わりの破綻から、彼は落莫とした気持ちでいるが、そのことを心で反芻する気力もなく、ただその落莫感に器物のように身を沈めていた。

細君のおさんは相変わらずきりきりと立ち働いている。下女への仕事の指し図、小僧への使い走りの言いつけ。それから帳場でのソロバン勘定。下の女の子に乳を飲ますかと思えば、台所へ行っての水仕事。手を前掛で拭き拭きもどってくると、部屋の端に立って軒端越しに空を見上げた。治兵衛は薄目を明けてそのおさんを見るともなく眺めたが、ふとその姿が美しく好ましく見えた。腰の線が柔らかく、ふっくりとしていた。彼は思わずその姿を見つづけた。

「今日は一日こんな天気なんだわ」そう呟くと、彼女は部屋のまん中へもどり、坐って、針仕事をはじめた。治兵衛は尚も彼女の姿を見つづけた。彼がこんなにおさんに気を取られたことは、この二年数か月の間ついぞ無かったことであった。今日思いもかけなく、こんな珍しい気持ちになったのは、どうやら昨夜以来小春からすっかり心が離れてしまったためのようである。

おさんはせわしく動かしていた縫いものの手をふと止めて、彼のほうを振り返った。治兵衛はハッとし、あわてて目をそらした。ほんとなら互いに目と目を見合って微笑めばいいのだが、そんなことは気恥ずかしかったのであった。

彼はその日一日じゅうそんなふうにぼんやりしていたが、時々目にするおさんの柔らかく、やさしく、しかもぴちぴちと活きのいい感じが、彼の心を終始ほのぼのとしたものにさせていた。

だが、午後もおそくなって、おさんの母親と兄の孫右衛門が来たあとは、彼の心はすっかり乱れさせられた。

――「曽根崎の紀伊国屋の小春という遊女を天満の馴染みの深い客が、ほかの客を押しのけ、今日明日に請け出す」とのうわさがもっぱらだが、天満の客と言えば、治兵衛にちがいな

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

い。そなた小春を思い切ったと言いながら、それは偽りだったのか、心底を訊きたい、ということで二人が来たのであった。

彼はうそなど言っていなかったので、それに対する答えはた易いことであった。「うわさの小春は紀伊国屋の小春にちがいないが、請け出す客は大ちがいで、伊丹の身すがらの太兵衛（独身者なのでそう言われている）ですわい」と言い、求められるままに誓紙を書いてわたしたが、その太兵衛がとうとう小春を請け出すらしいことが彼にとって堪えられない苦痛であった。

小春とは前の夜会ったさい愛想をつかし、縁を切ってい、何の未練もなかったが、ろくでなしの悪口屋の太兵衛に、治兵衛が身代つぶした、金に詰まった、と得意になって大阪じゅうをふれ廻られることを思うと、腸が煮えくり返るようであった。

雨は相変わらず降ったり止んだりで、まだ日暮れには間があるらしいのに、そんな天候のために部屋が小暗い。彼の寝ている向かい側に四歳のお末が眠ってい、横には六歳の勘太郎が腹ばって絵草紙を見ている。彼の枕もとに近く、おさんがつくろいものに余念が無い。

治兵衛は目はつぶってはいるが、眠れるどころではない。

「おお、あの紙屋治兵衛のうしろ姿を見い、女に現ぬかして身代つぶした男の、みっとも無さ

と言ったら……」
「いくら色男でも、金持ちの太兵衛に女を寝取られて、型無しだわい」
「色男、金と力は無かりけりか……」
「ワッハハハ」
そんな憎々しい声々が耳の中でワアワア鳴っている。思わず彼の白い顔に、涙が二た筋はふり落ちて来た。彼は見られてはいけないと思い、ぐんと掛け蒲団を引っぱり、顔を蔽(おお)った。
ふと針の手を休めて、何気なく治兵衛を見たおさんが、けげんそうに治兵衛のそばへ寄った。
「旦那さん、どうかなさいましたか」そう言って、そっと掛け蒲団をはがした。
と、現われた治兵衛の顔の両頬へ、涙がキラキラ光りながら流れている。
彼女の顔色が変わった。
「まああなた涙を出して……」
治兵衛は無言で目をしばたたいたが、それで又涙がまろび出た。
「あんまりです。あんまりです」突然おさんは叫んで、治兵衛をひき起こし、炬燵櫓(やぐら)へ押しつけるようにした。

「そんなに小春に未練があるなら、さっき誓紙など書かなければよかったでしょう。あなたは憶えていられないでしょうが、おととしの十月、中の亥の子（中旬の亥の日）に、炬燵ひらいたお祝いに、ここでいっしょに寝たのがさいごで、わたしのふところには鬼か蛇でも住んでいると思われているのでしょうか、それから二年あなたは寄りつきもされませんでした。

ようようお母さん、兄さんのおかげで、今日はむつまじい寝物語も出来るかと楽しみにしていたのに、何てむごい、冷たい方でしょう。そんなに未練が残っているなら、思いきり泣かれるがいい。泣きなさい泣きなさい。その涙蜆川へ流れて、小春が汲んで飲むでしょう。ああ、ひどいひどい」そう言うと治兵衛の膝をはげしく揺すり、つづいてわっと声をあげて泣いた。

「ちがうんだちがうんだ」治兵衛はものうそうに涙をふいた。それから独り言のようにぼそぼそ言った。

「わしは悲しくて泣いたのではない、無念なので泣いたのだ。悲しみの涙と無念の涙とは出どころがちがうなら、何も言わなくてもわかるのだが、同じ目から出るのだから、わからないのももっともだ。人間の皮かむった畜生女に、未練もへちまもあるものではない。あのいやらしい身すがらの太兵衛の奴、金はふんだんにあるし、妻子は無いし、とっくにから小春を請け出す工夫はしていたのだが、この間までは小春は太兵衛めの心に従わず、心配なさいますな、た

とえあなたとは縁切れ、添われぬ身になっても、太兵衛には請け出されませぬ。若し金の力で親方が無理強いにわたしをやるなら、死んで見せます、と度々言っていたが、ごらん、十日もたたないうちに、太兵衛めに請け出されることになったじゃないか」

そこから急に声を高めて、

「そんな根性のくさった四つ足あまに、微塵も心は残らないが、太兵衛というあの悪口屋に、治兵衛が身代つぶしただの、金に詰まっただのと、大阪じゅうをふれ廻られては、問屋じゅうのものにうしろ指さされ、生恥じをかく。ええっ、無念の涙、熱い涙、血の涙どころではない、熱鉄の涙がこぼれるわい！」

その治兵衛の言葉には毛筋ほどのうそも無かった。一語一語が血のような真実のこもったものであった。

そもそも治兵衛が曽根崎新地の遊女小春のもとへ通いはじめてからはもう二年有余。二人の間には深い愛情の火が絶えることなく燃えつづけ、互いに交わした起請（毎月はじめに取り交わす、愛情の変わらぬことを神仏にかけて誓う証文）も二十九枚に及んだ。だが、紙屋として老舗でこそあれ、いつも経済の苦しい治兵衛は、いつになっても小春を請け出す資力にはめぐまれず、そこへ近ごろ伊丹の太兵衛が彼女を請け出そうとしているので、二人は進退きわまり、心

中してあの世で添うことを約束し合っていた。

だが二人のその計画は小春の抱え主にも感付かれてい、このところずっと逢瀬を妨げられていた。それが昨夜、偶然にも街の煮売り屋で、小春に侍の客があって河庄へ行っている、ということを聞いた。——ああ、今夜こそは小春をつかまえ、かねての約束を実行しようと、彼は気もそぞろに河庄へ向かった。

治兵衛は河庄の格子の外から中をうかがった。障子がほんの少し明いているので見えたが、ちょうど日が暮れかけて来たところで、もう行燈がともされてい、その火影に、あごまで黒頭巾で包んだ侍の前に小春は俯いている。——ああ、ちょっと見ないあいだに頬が落ちて来た。ああやって客の前にいるあいだも、思っているのはみなわしのことにちがいない……そう思っているところへ、客と小春が窓口の方へ席を移して来た。治兵衛はハッとして、窓口から身をひき、家かげへかくれた。

侍客と小春の小声で話す声が、耳を傾ければ聞き取れる。自然に彼はその話を聴く姿勢になった。

「小春さん、さっきからのお前さんのそぶりや言うことから察すると、おかみが話していた紙屋治兵衛とかいう男と、心中するつもりらしいね。そうだろう。死神のついた耳へは、意見も

道理も入らないかも知れないが、それはあんまり愚かしい話だ。相手の親戚どもは、男の無分別のことは言わないで、お前さんだけを怨み、憎むにきまっている。お前さんには親御があるかどうか知らないが、若しあれば、これ以上の不幸は無い。成仏出来るどころか、地獄へさえも二人連れでは落ちられない。それを思うと、いじらしくもあり、気の毒でもあり、初会ではあるが、武士の立場として、見殺しにはいたしかねる。多分金で解決のつくことと思うが、五両や十両のことなら、御用に立てて助けてあげたい。誓って、誰にも言わないから、心底を打ち明けてくれないか」

「忝(かたじけの)うございます。まだ馴染みにもなっていないわたしに、そんなにも情け深い御言葉を下され、有り難さに涙がこぼれます。ほんとに、思い内にあれば色そとにあらわる、でございます。いかにも治兵衛さんとは死ぬ約束をいたしました。親方さんには逢瀬をせかれ、治兵衛さんは身請けの金も出来ず、南新地の元の親方さんと、今の親方さんとに、まだ年期が五年ものこっております。ここでほかの人に身請けされては、わたしはもとより治兵衛さんは尚のこと面目が立たないので、いっそ死んでくれぬか、はい死にましょと、引くに引かれない義理合いから、ふと言い交わし、すきを見て抜け出そうということになり、いつ死ぬかもわからない、はかない命をつないでいる次第でございます」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c